

ネットプリントの時代 久永草太

お見苦しくも言い訳から書きはじめるのだが、この二月、三月は獣医師国家試験に就職の準備にと、なかなかじっくり本を読む時間を取れず、万全とはいえない状態での原稿のメ切りを迎えることに尻込みする思いである。

そんな中でも、ネプリ（ネットワークプリント）で発表される短歌作品などは目を通してやすくてありがたい。またコンビニで数十円で印刷できる手軽さで、個人や同人、ときには歌集を出しているようなベテランの方まで、幅広い層の歌を読めるのも魅力的である。最近のネプリから心に残った歌を挙げていこうと思う。

- ・きみがきみとはぐれるまえに訪れた雷の日の水族館よ
- ・歩き方が伝統芸能みたいだな鏡の奥を風邪の私は

郡司和斗（ネプリ「天幕」より）

郡司が、所属する「かりん」に投稿した月詠約一年分、七十八首をまとめたネプリ。一首目、「自分を見失う」という言い方をよくするが、これを「きみがきみとはぐれる」と表現しているところに、迷子を思わせる面白さがある。二首目、「鏡の奥の」ではなく「鏡の奥を」とすることで、下句全体がある種連用形にはたらし、鏡にうつる自分の姿に動きを持たせることに成功している。

- ・そんなにも軽く秘密を打ち明けるならわたくしの膝に縋るな
- ・ああこれは父親の癖 ぬかるみを踏むやうな声でおまへをなじ

る

植木まい「まちがへてみました」(「銀竹」第二号より)

群馬の高校の卒業生のコミュニティ「銀竹」のネプリには、短歌だけでなく俳句や小説作品も収録されている。植木作の連作は掲出歌のように心身を怒らせた恋の歌に魅力があり、「膝」ぬかるみ」のような言葉を官能的に使いこなしていて印象強かった。

- ・認めたくないことばかり 新しい石鹼に古いのを引っつける
- ・かつお節の阿呆みたいな揺れ方は成仏するならこういうふうに

村上航「日々という例」(ネプリ「日々という例」より)

角川「短歌」の「この短歌選手権」予選通過作を改稿した村上のネプリ。一首目、新しい石鹼に融合させられる古い石鹼の悲哀が比喩として秀逸。二首目、「揺れ方は「こういうふうに」という不自然な言い差しが、不快感として読者に残る。不快感もまた余韻なのだ」と学ばされた一首である。

- ・酒抜けてしまひし夜更けふたり出でてラーメンの店探して歩く
- ・聞いたやうな気もするが忘れてしまひたるきみの名前をつひに

呼ばずき

山下翔「呼ばずき」(ネプリ「呼ばずき」より)

歌集『meal』が反響を呼んだ山下翔の新作。これまたよく食べる連作で、三十二首にわたる一夜のはしご酒っぷりが美味そうであり、またその中での人との出会い・別れが切なく響く。

ネプリは手軽だが、印刷できる期間が限られており、うっかり忘れたが最後、二度と読めなくなってしまうのが難点である。「最適日常」というサイトが、現在発行中の短歌のネプリを多くまとめてくれているので、ぜひ活用されたい。